

編 集 後 記

例年になく長い梅雨が明けて、ようやくぎらぎらした太陽がまぶしい盛夏に突入した。地球規模で温暖化や異常気象が災害や飢饉をもたらす、重大な問題になっていることは新聞やテレビで連日報道されているが、われわれが幼少時の思い出として記憶している四季の気候と比べると少しずつ変化しているというのが実感である。人類が地球上で生活するようになってからの期間は、地球の歴史からするとわずかな時間であることは、さまざまな研究から明らかにされている。それを考えれば、異常気象といわれる状況が、果たして異常なのか、それとも単なる地球規模の一現象なのか、解釈が難しい。

さて、先輩達から教えられ、消化器外科の常識と思われていたことが、時を経るうちに、さまざま変わりつつあることは、地球上の気象の変化と似ているところがあり興味深い。枚挙に遑が無いが、たとえば、術後のドレーンである。種類や本数、留置期間などが、大分変わってきた。消化管の吻合法についても、以前は粘膜下層の連続性が重要であるとして、Gambee 吻合や層々吻合が目されたが、今日では、circular stapler や linear stapler が頻用されるようになった。その原理は漿膜が接触する内翻縫合や粘膜同士が接触する外翻縫合を staple が支えるものであり、通常の消化管吻合ではこの方法で良いことが示された。術後の経口摂取、創傷管理、在院期間なども、ここ数年で大きく変わってきた。これらは、機器の開発、患者や社会の要請、ガイドラインの普及、経験や研究成果の蓄積、鏡視下手術の導入など、さまざまな要因によるところが大きいと思われるが、嘗ては常識とされてきた中に、科学的な検証が十分行われなまま、経験則として伝えられてきた事柄が少なくないということかも知れない。

編集委員会では、投稿された論文を症例報告は2名、原著論文は3名で読ませていただいている。掲載論文数からいうと、その比は7対1で、症例報告が圧倒的に多い。受付から採用までの平均期間は3.5か月(第38巻)、受付から掲載までは9.5か月(同)で、さらに短縮できるように編集委員と事務局が一丸となって臨んでいる。会員の皆様には、日頃の臨床で気づいたことや疑問に思う点を、ぜひ科学的に検証し、論文として投稿していただきたい。この場をお借りして、日頃から論文作成の指導にあたられている先輩医師の方々の熱意と努力に感謝を申し上げたい。

(大谷吉秀)